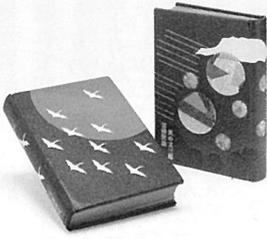


新年度は 特別展「美しい本 製本装幀家ティニ・ミウラのしごと」でスタート

2026年度展示 夏は「なかがわちひろ展」



宮澤賢治『風の又三郎』
川端康成『千羽鶴』

2026年、春の特別展はドイツに生まれ、晩年を宮城県仙沼で過ごした、世界的な製本装幀家のティニ・ミウラさん（1940-2025）の仕事を紹介しします。ヨーロッパの伝統的な革製本の製本装幀技法を学んだティニさんは、世界のコンクールで数々の賞を受賞し、伝統を継承した職人技と現代的デザイン感覚を融合させた芸術性の高い限定版特装本の装幀家として知られるようになりました。ノーベル賞の賞状制作にも携わり、物理学賞の朝永振一郎、文学賞の川端康成の賞状も制作しました。以後、図書館、美術館や博物館、愛書家などから依頼された稀覯本、愛蔵本の装幀のほか、イギリ

スやスウェーデンの王室の公式文書の製本装幀を手がけるなど、製本装幀の第一人者として活躍します。ヨーロッパ、アメリカ、東京などで制作と後進の育成を行い、2018年にパートナーである三浦永年さんの故郷宮城県に夫妻で「宮城芸術文化館」を設立し、ここを終の拠点と定めて、2025年11月に亡くなるまで創作活動を続けました。本展では彼女が制作・デザインした革装本約70点を展示します。

夏休みは「なかがわちひろ展」こどものほんの森へ」を開催します。絵本作家・児童文学作家・翻訳家のなかがわちひろは、小学校4年から中学校3年までを仙台で過ごしました。1990年に翻訳児童書『ふしぎをのせたアリエル号』でデビューし、これまで約200作品を手がけてきました。発行15周年を迎える「プリンちゃん」シリーズをはじめ、人気の絵本「おたすけこびと」シリーズ、児童文学作品、翻訳絵本など、その多彩な作品の数々をパネルや貴重な原画で紹介し



作・絵 なかがわちひろ
徳間書店

ます。また展示以外のイベントとして、5月には谷崎潤一郎賞を受賞した木村紅美さんをお迎えして「北根ダイアログ」を、6月には「ことばの祭典」を開催します。さて当館は1999年の開館より27

文学の杜

仙台文学館 友の会会報

第80号

令和8年3月25日発行

仙台文学館友の会（仙台文学館内）

〒981-0902

仙台市青葉区北根2丁目7の1

電話 022(27)3020

仙台文学館のホームページ

<https://www.sendai-lit.jp/>

ていることから、夏休み企画終了後の8月24日から2028年4月末（予定）まで、全館休館のうえ大規模改修を行います。休館中は日立システムズホール仙台（青年文化センター）を会場にした事業展開を予定しており、佐伯館長の講座と小池光短歌講座は同センターの研修室で、年賀状展は1階ロビーで開催します。また来年2月にはシアターホールでライブ文学館「歌人・小池光 短歌と音楽」を予定しています。

大規模改修は、これから先も皆さまに気持ちよく、安全にお使いいただくための工事です。休館中の動きは、本誌及び仙台文学館ニュースでお届けします。ぜひ、引き続き仙台文学館をどうぞよろしくお願ひ申し上げます。
(芸芸室長 渡部直子)

仙台文学館2026年度展示予定

◆特別展「美しい本 製本装幀家ティニ・ミウラのしごと」
4月25日(土)～6月28日(日)

◆夏休みこども文学館えほんのひろば「なかがわちひろ展 こどものほんの森へ」
7月18日(土)～8月23日(日)

◆第25回 新春ロビー展「100万人の年賀状展」
2027年1月中旬～1月下旬

会場：日立システムズホール仙台（青年文化センター）1階ロビー
*タイトル、会期は予定です。

文友一滴

一月三十一日「花座」で春風亭昇平の落語を聞いた。初めの二席は「初天神」と「うどん屋」で、めでたい明るさと冬の夜の寒さと暗さが対になっていて、一月の寄席を堪能した。中入りを挟んで締めが「おたふく」だった。「おたふく」は山本周五郎の作品を落語にした創作だ。「おたふく」を、おしずさんを、どう描くかと期待しながら出陣を待った。

山本周五郎を読んだのは、「樅の木は残った」がドラマ化された頃だ。何か読んで名残が本棚にある。その中に「おたふく」もあった。落語の前に読み直しはいいかと思ったが、いい機会なので本を開いた。そして、女性の登場人物にもどかしさを感じ、年齢を重ねてから読む本なのか、男性が好む小説なのかと本棚にしまった記憶が甦ってきた。読み直して、周五郎はおしずさんがとても好きなんだなと思った他は、以前と変わらない感想を抱いた。それは小説の巧みさには関わりない好みの問題で、つまり半世紀経っても変わらぬいい好き嫌いが人にはあるということなのだろう。

小説を語る、それを聞く。面白い体験で、意外な発見がある。目で読む読書の想像は限りなく自由で、自分勝手でもいい。しかし、語り聞き、そこに仕草が加わると別の世界が現れる。語り手が描き出す臨場感は、まるで自分が透明人間になってその場を見ているようだ。亭主の貞二郎がおしずの筆筒を開ける。後ろめたいけれど止められない。確かめたいけど知りたくない。今なら妻の携帯を盗み見する夫の心境か。聞いて、見ていてドキドキする。妹のおたかが貞二郎に詰め寄る緊張感と距離感、長屋の空間だからこそと気付かされた。あつという間の二時間が過ぎた。「うどん屋」に刺激され、暖かい麵と汁を啜りたく、いそいそと蕎麦屋に向かった。
(和)

友の会随想

地元岩沼市には俳聖松尾芭蕉が訪れて句を詠んだ二木の松というものがある。その句とは「桜より松は二木を三月越し」というもので、江戸を発つ時、弟子の拳白が「武隈の松にこそ目」松見せ申せ「運桜」に応えたものだ。二木の



日本語を愛おしむ

会員 一條 博之

地元岩沼市には俳聖松尾芭蕉が訪れて句を詠んだ二木の松と称。ここで芭蕉は「武隈の松にこそ目」と大いに感動している（『奥のほそ道』）。武隈の松は万葉の時代から和歌に詠まれた歌枕である。芭蕉没後百年、岩沼の俳人仲間で百年忌の句会が催された。その中心となったのが謙阿という人物で、芭蕉翁を讃えつつこう詠んでいる。「朧より松は二夜の月にこそ」その意は、「松島の朧月は如何

の言葉をご存じだろうか。SNS上や若者達がよく使う略語・新語。毎年文化庁が行なっている国語世論調査を見ると、国語が乱れていると思う人の割合が年々減っている。その主な理由は、言葉は時代とともに変化するものだから。なんと寛容な国民が増えたことか。

昨年十月十九日の河北新報の社説でも「増える略語 乱用は慎みたい」との見出しでいくばくかのブレイキを促していた。そして最後に「日本語が美しい言語であり続けられるかどうかは社会のありようにかかっている」とあった。ここには「日本語が美しい言語」であるとの前提がある。そこで授業で高三の生徒に聞いてみた。日本語は美しいか？ 生徒曰く、はい。理由は、日本語には色々な言い方があるから、敬語があるから等々。例えば、雨もいろいろ「水雨・五月雨・天気雨・小糠雨」。ほーっ。敬語を指摘した子も偉い！ 若い彼らの身の内にも日本語の美しさを感じる感性があった。優しく大事に育みたいものである。

第70回読書会

人間の残酷さと優しさ

有吉佐和子『青い壺』第五話

昭和の代表的作家有吉佐和子が1977年に発表した『青い壺』が、50年を経て再び話題になっている。青い壺が、成り行きで人から人へと渡って行くという13の連作短編。その第5話を読んだ。故郷の兄夫婦と暮らす母親から離れて、東京のマンションに一人暮らしをす

る千代子の元に、母の目が見えなくなり困っているという厳しい口調の電話が嫂からかかってきた。連休に帰ってみて千代子は愕然とする。孫たち3人を共に育てて役に立っていた母は、今この家庭ですでに用済みの疎まれる存在となっていたのだ。母を引き受けると決め、自分のマンションに連れ帰る。ジュウシマツを飼い、香りのある花を生けるのは娘ならではの。

千代子の元に、母の目が見えなくなり困っているという厳しい口調の電話が嫂からかかってきた。連休に帰ってみて千代子は愕然とする。孫たち3人を共に育てて役に立っていた母は、今この家庭ですでに用済みの疎まれる存在となっていたのだ。

気が遣いだった。やがて母は目の手術を受けることに。

- * 母親は70歳、当時としては高齢だった。
- * 老人福祉の時代感を思った。
- * 母娘の良い形と思えた。距離感やユーモアの感覚もある。
- * 家族の有り方はどの時代も同じだと思いが、サラリとした描き方になっている。
- * 現在にもあることだ。自分の親を施設に入れる時に抵抗されたことを思い出した。
- * 母と娘の情愛。一緒にいることで安心と平穏がある。

12月10日4名出席。 (佐)

第71回読書会

下町商店街の明朗な人情

ねじめ正一『高円寺純情商店街』「にぼしと口紅」

大人の思惑と中学生の主人公の微妙な心理が大らかに溶け合う愉快な物語である。乾物屋の一人息子正一は、祖母、両親との暮らしである。地味なこの店の隣に化粧品店の飯店舗が賑やかに開店した。従業員はピンクの上着のお姉さんが4人。古い商店街はにわか活気付いた。少年の中に大人の心が温かく沁みて来る。昭和30年代が懐かしく思い出された。乾物屋と化粧品店が、温かく交流できている。子どもが地域で育てられる時代の様子も見える。

- * 大人たちを何となく理解していく様が少年の目を通して描かれている。
- * オノマトペが、ひらがなとカタカナに使い分けてある。意味が有りそうだ。
- * 祖母も母親も化粧品店に巻き込まれて行く場面がこの物語を意味付けている。
- * 続編2冊も読んだが、面白かった。
- * 悪意が全く無い描き方なので、読んでいて心地良い。

2月11日4名出席。 (佐)

次回以降の日程とテキストは以下のとおりです。
4月8日(水)14時 辻仁成『海峡の光』(新潮文庫)
6月10日(水)14時 丸谷才一『樹影譚』(文春文庫『樹影譚』所収)
※友の会会員は自由に参加できます。申込みは友の会事務局まで。

友の会イベント

朗読とトークのひととき

～友の会会報「風と歩こう」欄に
綴られたエッセイから～



2月23日、14時から、「友の会イベント」を文学館講習室で開催しました。今回のイベントは、文学館の写真展「しゃんしんごと人・佐々木隆二の世界〜人と文（ぶん）のものがたり」関連として、文学館との共催事業となりました。朗読と聞き手は渡辺祥子会長、お話はカメラマンの佐々木隆二さんと一文字ひろみ、近田裕子、佐野のぶ、長沼和子（風と歩こう執筆者）でした。

「風と歩こう」は友の会会報第52号から始まり、会報担当者が持ち回りで担当するエッセイ欄です。編集会議で「文学館の敷地や環境も紹介したいね」という話

から始まりました。執筆者やカメラマンが、どのような気持ちでこのエッセイ欄を担当したか、知っていただく機会となりました。参加者は会員以外も含め、全体で61人でした。

会報61号

風と歩こう ⑩

執筆の順番が回ってき文学館の敷地周辺を歩くのが私の書き方です。この日も水辺から始まり、たどり着いた坂の上の野原で出会った白い椅子の様子を書きました。

隆二さんの写真の白い一脚の椅子は、文学館から運んで別の場所で撮ったとのことでした。木洩れ陽が椅子に注ぐ真昼を待って……。その待ち時間と手間とが有難く思われました。

エッセイを書き終えても気づかないこと、見えていなかったことを、写真から知らされました。風と歩こう⑩のコケの写真がその一つ。今回マクロレンズで撮ったとうかがい、改めて、驚きながら見入ったものです。（近）

会報66号 風と歩こう ⑮

森林インストラクターと歩いた森の散歩を書きました。出発前にイタドリ

葉っぱを掌に載せて叩くとバン！と大きな音がしました。熊よけ葉っぱ爆弾だそうです。なんとコロナ禍で全員マスクをつけての団体移動は奇妙奇天烈の感がありました。歩く先々でしゃがんで小さな草花を、見上げては木々の緑を楽しみました。本日、隆二さんからシャッターチャンス

の難しさをうかがい、ご苦労が偲ばれました。

このところ、市街地にまで出没する熊をイタドリでよけられるはずはない。一方でコロナ禍はいつまでも続くわけではないことに気づかされました。（一）

会報68号 風と歩こう ⑰

文学館の門を抜けて坂道を上る時、目に入るのはしっとりとした深い緑。静かさの中に吸い込まれるような感覚が生まれます。ある日、帰りの坂道を下りながらびっしりと家の建ち並ぶ向い側の傾斜地を目にしました。住宅地は陽を受けてキラキラと輝いていて、こちら側の静とあちら側の動、あまりの対照的光景に思わず足が止まりました。

あの住宅地に沢山の灯がともり、文学館が深閑とした森に包まれる夜の場面を想像してみます。そんな私の想いを見抜いたように、隆二さんはトワイライトの幻想的な写真に収めてくださいました。（佐）

会報75号 風と歩こう ⑳

これは、前号までとは逆に、隆二さんの写真からの発想で書きました。隆二さん

んは「風と歩こう」のために、毎回数枚の写真を撮ってくださいます。誌面に載らなかったものもたくさんあり、紹介の機会を探っていました。7月発行の会報なので、針葉樹の木漏れ日の中で葉を広げる朴の若木の写真を選びました。梅雨と夏、静かな館内と元気な子供たち、これからの文学館がこうであれば、という希望をこめたつもりです。

自分のエッセイを朗読していただく。何という贅沢で特別な時間。終了後に担当者一同話が弾みました。（和）

当日のアンケートにお寄せいただいた感想から

- ◇写真とエッセイの組み合わせが味わい深い。
- ◇時にはゆっくりと立ち止まることも大事だと思った。
- ◇言葉も写真も生きていると感じた。
- ◇写真も朗読も素晴らしかった。
- ◇文学館の良さを再確認、場所の良さにも気付かされた。
- ◇これから時々文学館へ立ち寄ろうと思った。
- ◇文学館の周辺を歩いて見たい。
- ◇見過ごしていたことの多さに気付かされた。
- ◇「風と歩こう」のタイトルがいい。
- ◇良い企画だった。とても良い時間が持てた。
- ◇スライドが良かった。最後の「つづく」も良いと思う。

私と文学・13

林子平をめぐる

江戸時代中・後期の思想家林子平の生涯を描いた植松三十里著『調彫二人』(中央公論新社)という歴史小説がある。外国勢力に備えるべく海防強化の書を著わす子平。これが幕政批判と見なされ、本の回収・出版中止の憂き目に遭い、挙句には仙台の兄の元での蟄居を命じられる。「開国兵談」を完成させようと、子平は秘かに版木(文字を彫った板)を抱え、女版木彫師のお槇とともに江戸から苦行の末、仙台にたどり着くが程なくお槇は病死。再製本の夢叶わず子平も病に倒れる。ふと気になった。全力で子平を支えた、お槇は実在の人物だろうか。しかし、読んでいる内にその気も失せた。物語の終盤、病の床で子平は辞世の歌「すくふべき ちからのかひも なかぞらのめぐみにもれて 死ぬぞくやしき」を詠む。それから「お槇の似顔絵を取り出し、余

白に「彫残二人」と書き入れた。……「彫残」とは「いたみやぶれる」という意味だ」とつづる。子平の無念が、ひしひしと伝わってくる。

冬たけなわのある一日、仙台市若林区の子平の座敷牢があつた場所を訪ねた。住宅地の一角にあり、それがあつたことを思わせる痕跡は何もない。さらに同市北山の龍雲院に足を向ける。覆いの中に古色蒼然とした小さな墓が静かに佇んでいる。子平の墓だ。罪人ゆえ建てられたのは赦免後と伝わる。墓のそばに子平が六無斎の号で詠んだ「親もなし 妻なし 子なし 版木なし 金もなければ 死にたくもなし」の石碑があり、背負われた子平の過酷な運命に改めて思いを馳せた。一冊の本に導かれ、ここまでやって来た。日もかげりはじめ、今にも雪が降り出しそうな雲行き。もし、今の時代に子平が生まれていたら、どんな人生を歩んでいたのだろうか……そんなことを思いながら家路を急いだ。(其田敏美)

私と文学・14

図書館巡り

私の住む大河原町は、五つの市町村が取り囲んでいる。だから、各市町村の図書館はほぼ等距離にあり、図書館巡りに恵まれた環境にある。賞をとった人気の本は貸出中であることが多いが、時々手にする僥倖に恵まれる。その例が、阿部焼子著『カフネ』だった。

また、除籍図書といって廃棄処分となる前に、持ち帰りできるコーナーに遭遇することも。そんな一冊が『未来の余白から』である。著者は最上敏樹という大学の先生。堅苦しいものではなく、エッセー風に、世間の風潮を切り取る。そこからの一節。「狂信と偏見と不寛容に

とりかこまれた、反知性の時代に……。知性の在り方を教えてくれる。それは一知識や知性は、佳き目的に、そして他者への敬意と共感をこめて行えるか……十年前の著作だが、現在にも示唆を与えている。

閑話休題
ある図書館に、一回も貸し出されなかった本のコーナーがある。もぞこくなって、愛おしくなつて、一冊借りてきた。書名は『冷戦アメリカの誕生』。読後の感想は後日のこととします。(鈴木正博)

「私と文学」の原稿募集

約600字で会員のみなさまの原稿を募集します。文学館友の会事務局まで、お送りください。

風と歩こう 29



Photo by Ryuji Sasaki

あと数日で二月という厳しい寒さの午後に文学館に寄った。暖房のきいたオーブンスペースで、コートを脱いで書物を広げている人たちを見ながら、年賀状展の会場に向かう。弓形の階段をおりきった所に「仙台の伝統門松」が飾られていた。数年前までは2階正面玄関を見て、その粗削りな豪快さに感心したことを思い出し、今回は説明書にも丁寧に見入った。

今年の干支は馬、年賀状にはアニメや劇画風の様々な馬が描かれ、神社の絵馬のようで、元気なオーラを感じて館外の水辺に出た。

いつもはそこで色鮮やかな鯉の優雅に泳ぐ様子を見るのが楽しみなのだが、どこにも見えない。凍るほど寒い日は水底にもぐりこんでじっとしているのだとか。鯉もいない水辺の光景は、まさしく冬色一色というところ。落葉一つなく掃き清められた小道を歩いていくと、いつもは鬱蒼とした枝葉の緑や花に見入って、あまり注目していなかった樹木の皮の肌の多彩さが目に留まる。裸の木立のたたずまいが、こんなにも凛として清々しかったのかと見直しながら、水辺の玄関に引き返すことにした。(近)

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第80号をお届けします。

▽国立子ども図書館前に小泉八雲顕彰碑がある。何度か見てはいるが今回朝ドラの「ばけげん」を見るにあたって解説板をつくり読んでみた。八雲の書をこよなく愛し、若くして病死した土井晩翠長男の遺言により建立されたとのこと。上部に天使が、下半分は小泉八雲の胸像でできている。(一)

▽数年前の秋、泉区の我町内でクマの目撃情報があつたと聞いた。冬眠に入るまで注意のことだった。昨年末には町内のスーパードリにも出たと報じられた。動物界の異変は、いずれ人間にも廻ってくることはないか、となにやら背筋が冷たくなる思いで関連ニュースに注目している。(近)

▽車を出すまでの何十秒かが定点観測の時間だ。向かいの大木を見上げ、振り向いて数本の銀杏の街路樹をながめる。どちらも落葉して裸ん坊だ。でもその枝先の緊張が緩んできたように感じる。ほんのり赤くなつてきたようだ。顔色を取り戻しつつある状態なのか。まさに「光の春」を実感している。(和)

▽「白々と夜が明ける」。この絶妙な表現は誰がどの時代に初めて使ったのだろう。太陽が出る前の静かな明け初めの様を表すのに、これ以上の言葉は見つからないような気がする。

障子の部屋ではそれが実によく分かる。東に面した障子が夜明けのひととき、まさに白々と明るんで美しい。(佐)